

プロローグとレオンとの出逢い

「ごきげんよう。今日もいいセックス日和ですわね」

「ええ、本当に……♡」

バラが咲き誇るアーチをくぐり、ぴつたりと身体の線に沿ったきわどいデザインの制服に身を包んだ少女たちが、発情も露わに語り合う。彼女達がノーブラでゆっさゆっさと胸を揺らして歩くたび、「むち♡」「むち♡」と男性向けエロ漫画のような擬音が浮かび上がりそう。

美しく手入れされた植え込みからは「おほ♡」「いぐっ♡いぐう♡」など、えげつない喘ぎ声が聞こえてくる。

朝の爽やかな空気におよそ似つかわしくない光景だが、この世界では極めて平凡な日常の一コマだ。

（今日もエグいくらいサカリまくってるなあ……）

この世界に来て二年も経つとこんな光景にもさすがに慣れてきて、鳥のさえずりのように自然と聞き流せるようにはなってきた。

いや嘘です。まだちょつと抵抗ある。

人間、長年培った常識というのはなかなか変えられないものだ。

私は元々、この世界の人間ではないのだから。

本来の私の年齢は28歳。現代日本で生まれ育った、乙女ゲームが好きなごくごく平凡なOLだった。

ある日突然、プレイしていた乙女ゲームの中の世界に、いわゆる異

世界転生というやつを果たしてしまったのだ。

しかもよりによって、超ドスケベと名高い18禁乙女ゲームの世界に。

『ドスケベ学園♡セックスは紳士淑女のたしなみです♡』

それがこのゲームのタイトルだ。

この世界ではセックスは紳士淑女のたしなみとされており、貴族の子女は正しいセックスを行うため学園で学ぶことになっていた。

学園では二年生になったらセックスパートナーを選ばなくてはならない。

将来の結婚相手を選ぶ側面も大きいため、皆血眼になってお相手を探すのだ。

相手の家柄、容姿、人柄、学業成績の他に、『魔力』も重要視され

る。

この世界では生まれ持った魔力で人生が左右される。

遺伝性が高いため、代々強大な魔力を持つお相手と番えば、産まれてくる子供の魔力も強くなる。

往々にして魔力が強い人物は家柄も良い。

つまり、人生一発逆転も可能というわけだ。

プレイヤーであるヒロインは、六人の男性の中から一人パートナーを選び、セックスに励むという設定だ。

処女だったヒロインが攻略対象によつて開発され、あらゆる快感を与えられメスになっていく様はプレイしていて大変興奮したし、エロがメインとはいえストーリーもなかなか作り込まれていて良作だと思う。

でも、あくまでゲームだから楽しめたのであって、リアルで同じ事をしたいかと言われると首をひねるわけで。

幸いなことに、転生したのはヒロインではなく名もなきモブ令嬢だったので、ドスケベな目に遭わずに済みそうだ。

もしヒロインだったら、ルートによってはハーレム状態で攻略対象全員とのPしないといけないところだった。

6Pとか正気の沙汰じゃない。

ゲームをプレイした時は、おまんことアナルと口じゃ足りなくてパイズリと左右での手コキも同時にやらないと回らなかったし。

全員中出しするまで終わらなかったし。

てか体位どうなってるのよ。絵師さんは描くのがさぞかし大変だったんじゃないだろうか。

ともかく、私は目立たず地味に生きることに関心したのだ。

おかげで一年生の間は誰とも関わらず、無難にやり過ごすことが出来たけれど――

（問題はこれから、なのよね）

この学園では、一年生では座学でセックスの基礎知識について学び、二年生では男女ペアになり、実技を学ぶことになっている。

つまり、必ず誰かセックスパートナーを見つけなくてはならないのだ。

実技が始まるのは来月からなのだが、それまでに誰も組んでくれなかったら留年、下手すれば退学になってしまう。

なので男子生徒も女子生徒も、入学時から互いに自分の身体を見せ

つけるような服装で登校し、セックスアピールに励むのである。

さすがに退学は困る。が、これといって特徴のない顔と身体のは男子生徒から声がかかりそうにない。

かといって、他の女子生徒のようにおっぱいを強調したピッチピチのブラウスをノーブラで身につけたり、超ミニスカートで登校しておまんこにショーツが食い込みまくっているところを見せつけるなんてとても出来ない。

せめて私の家の位が高ければ、爵位目当てで寄ってくる男子もいるんだろうけれど……モブ令嬢の私の家は下級貴族もいいところ。魔力も限りなくゼロに近い。

したがってお誘いは期待出来ない。

（あーあ。どうせ私はモブなんだし、適当なところでログアウトして

元の世界に帰れないかなあ……)

——などと考えていると。

キャーッと女子生徒たちの歓声が聞こえてきた。

「レオン様よ！」

「ああ、今日も素敵ねえ……！」

私は反射的に、背後を振り返った。

バラのアーチをくぐり、長身の男子生徒がこちらに向かって歩いてくる。

陽の光を受けて、ミルクティ色の髪がキラキラと輝く。

アメジストのような深い紫の瞳は柔らかく細められて。

彼の周りを取り巻く女子生徒たちへ平等に微笑みかける。

ファンタジー作品特有の装飾過多気味の衣装も、ひとたび彼が纏え

ば逃えたようにびったりで。

どこをとつても完璧なその姿に、思わず見とれてしまう。

——レオン・ヴィクトール。

王国の第二王子で、この学園の二年生。

容姿端麗、頭脳明晰、剣技にも優れ、更には甚大な魔力を持つ完璧超人でありながら、それを鼻にかけない気さくな性格で、学園中の女子生徒の憧れの的。

そして、私の推しでもある。

この世界ではモブである私がお目にかかる事はないだろうと思つていたから、こうして会えただけでもラッキーだ。

（ああ……やっぱ顔がいい……！）

彼の姿を余すことなく脳に焼き付けようと、気づかれない程度に遠くから視線を送る。

（頭ちっさ！ お人形みたい。股下なつが！ 一体何メートルあるのよ!? ああもう、美しすぎる）

顕微鏡で見ても毛穴が出現しなさそうな、白く滑らかな肌。

朝摘みの紅いバラを搾って筆で塗ったように色づく艶のある唇。

まさしく絵に描いたような美貌に目が眩みそうだ。

三次元に出現した彼を見られるなんて思ってもみなかった。転生して良かった……！

「レオン様！ おはようございます！ あのつ、クッキーを焼いたのでぜひ召し上がっていただければと……！」

「レオン様！ 放課後ティーパーティーを開こうと思っていますの。」

良かったらぜひいらしてください」

女子生徒達はレオンへのアピールに余念がない。

お誘いだけでなく、乳首がギリギリ見えそうで見えないくらいに胸当てが小さなビスチェを上着代わりにつけていたり、はたまた股間がスケスケのショーツをこれみよがしに身につけていたり。

積極的にレオンの腕に自分の胸を押しついたり、後ろから股間をレオンのお尻に押しつけ、腰をくねくねさせている生徒もいる。

皆、レオンのセックスパートナーに選ばれたくて必死なのだろう。

（大変だなあ……まあ、私には関係ないけど）

推しのご尊顔を存分に拝めたので満足したし、そろそろ教室へ向かうとしたのだが。

「ねえ、君！ ちょっと待って」

レオンが取り巻きたちを振り払い、息を切らせて私のところまで駆け寄ってきた。

（えっ……な、何!?）

「ねえ、君二年生だよな？ もうパートナーは決まっているの？」

「え……いえ、まだですけど」

「良かった……！ 間に合った」

レオンの顔が花のようにぱつとほころぶ。

そして私の前に跪き、すつと手を差し出した。

「君こそ、僕の運命の人だ。セックスパートナーになって欲しい」

「……!？」

取り巻きの女性たちの顔が一気に青ざめた。

「あ……あんな地味でダサイ子が……レオン様のセックスパートナー

ですって!？」

「信じられない!?　どんな卑怯な手を使ったの!？」

「まさか魅了魔法でも会得しているんじゃないや……」

（私だって信じられないよ!）

と、叫びたい気分だった。

だってヒロインならともかく、私は名もなきモブなのに。

「あ、あの……どうして私に……?」

「理由なんて必要ある?　君を見た瞬間、僕の全身に電流が走ったんだ。つまり一目惚れ……ってことかな」

ますます取り巻きたちがざわめく。

当然だろう。

身体も顔も中の下そのもの。とりたてて目立つところのない私に一

目惚れだなんて。

（もしかして、何かのバグでは……？）

いや、それしか考えられない。

もしそうなら、レオンを正しいルートに導いてあげなくては。ゲームとしてそれはまずい。

「えっと……わ、私ではレオン様にふさわしくないかと……も、もつと適任の方がいらつしやると思いますわ。例えば、レティシア様とか……」

小首を傾げて笑みを作り、レオンへそう訴える。

ちなみにレティシアというのは、このゲームのヒロインのデフォルト名だ。

「ああ、レティシアなら既にパートナーが決まってしまったからね。

ほら、あそこですっかり励んでいるよ」

レオンが顎でくいつと植え込みの方を指す。

「んほおおく♡おまんこ♡ぎもぢい♡もつとグリグリ奥まで突いてええ♡」

「はあ♡はあ♡レティシアは本当に子宮ファックが好きだね……！」

そらっ♡奥までどちゅどちゅ突いてあげるよ♡」

「くう……！ レティシアのケツマンコは絶品だ♡S字結腸ほじほじ貫通してやるっ♡」

「口が留守になつてゐるぞ、レティシア♡口まんこですっかり俺に奉仕しろっ♡」

「ふあ♡しゅみまふえ……んう♡ぶちゅ♡ぶちゅるうう♡」

「これが終わったらボクとどちゅどちゅ種付けプレスだからね？ 手

コキだけで終わるなんて許さないよ？」

「ひゃいっ♡この牝豚の孕み袋にたっぷり子種汁を注ぎ込んでくらしやいっ♡」

植え込みの向こうでは、ヒロインのレティシアがヘーゼルナッツ色の綺麗な髪を振り乱し、男五人と組んずほぐれつのお下劣セックスを繰り広げていた。

どうやら私がずっと聞かされていた下品なオホ声は、レティシアのものだったらしい。

ちなみにその五人というのはレオン以外の攻略対象全員だ。

（ま、まさかもうハーレムルートに突入してるなんて……）

ゲーム本編では、ハーレムルートに入るには卒業式のあとだったはずなのに。

というかセックスパートナーって一対一でないといけないと思ひ込んでた。

五人いてもオッケーだったとは……

どうしてこうなった。

「さすがに五人もパートナーがいては僕の入る隙はないよ。それに

……僕は一人のパートナーを一途に愛したいんだ」

レオンが私の手に頬ずりし、熱い眼差しで見上げる。

「ゆくゆくは、君を妃として迎えたいと思っている」

「……えっ!？」

衝撃的な発言に、ギャラリーが色めき立った。

「きつ、妃ですって!？」

「レオン様、正気ですよ!? その子どう見ても下級貴族か平民にしか

見えませんわ！ 妃にふさわしいとは思えません！」

「魔力だつて低いに違いありませんわ！ そんな芋臭い子を妃に迎えるなんて、我が国の恥です！」

取り巻き達が口々にレオンへ進言する。

酷い言われようだけど、その通りなので仕方が無い。

ぎゃあぎゃああと金切り声で喚く取り巻きたちを、レオンが無言でぎろりとにらみ付けた。

「……っ！」

氷のように冷ややかな視線を向けられ、取り巻き達がひつ、と喉をひきつらせて口をつぐむ。

「彼女が妃にふさわしいかどうかは、僕が決めることだ。君たちに口出しされる筋合いはない」

「もっ……申し訳ございません……！」

取り巻きたちは口々に謝罪の言葉を告げ、あたふたと逃げるように去って行った。

「そういうわけで、僕の申し出を受けてくれる？」

ニツコリと微笑み、レオンが言う。

こんなことありえるのだろうか？

いくら5Pルートに突入しているとはいえ、ヒロインのレティシアには目もくれず、地味顔のモブ令嬢である私にベタ惚れだなんて。

しかし、推しに求婚されるのは悪い気がしない。むしろ最高。昇天しそう。

——でも。

（レオンとセックスパートナーになったら、す……つごく大変なんだ

よね)

レオンルートは台詞を暗記して諳んじられるくらいにやりこんだので、これからどんな目に遭うか容易に想像がつく。

ゲームの中だからどんなエロエロなことをされても興奮できたけど、いざ自分が同じ事をされると思うと、ちよつと怖い。

それに、ストーリーに絡まないモブである私が、攻略キャラであるレオンとパートナーになってしまったら、この世界に多大な影響を与えてしまうのではないだろうか？

そんな私の考えを見透かすように、レオンが私を真っ直ぐに見つめる。

「大丈夫。この世界は僕と君だけのものだから。君が僕のパートナーになることは、あらかじめ定められた運命なんだよ」

なんだか意味深なことを言われているのが気になるけど……

星をちりばめたような推しの美しい笑顔を見せつけられて、一気に思考が吹っ飛んでしまった。

（こんな熱っぽい目で見つめられたら、断れない……！）

やはりビジュが良すぎる。こんなの勝てるわけない。視線だけで腰砕けになりそうだ。

気づけば私は、差し出された彼の手を取っていた。

「……謹んで、お受けいたします」

ぱあああつとレオンの顔が輝いた。

「ありがとう……！ 本当に嬉しいよ。これからよろしくね。僕の花嫁さん」

「は、はい……よろしく願います。レオン……様」

「いやだな、もつと気さくに話してよ。レオンって呼び捨てでいいから」

「はい……じゃなかった、う、うん……レオン……」

おずおずと名を呼ぶと、レオンがニツコリと微笑む。

（ああ！ やつぱり顔がいい！）

もう無理。メロつきが止まらない。やつぱり……レオンが好き！

ともかく、こうして私の学園生活二年目は幕を開けたのである。

第一章　くずる剥けクリは淑女のたしなみ

「さて。来月から本格的に実習だけど……その前に下準備が必要だよ
ね」

レオンとセックスパートナーになって数日後の放課後。

私は彼に呼び出されて【行為室】にいた。

【行為室】とは、セックスを行うための部屋である。

授業で使用するのもちろんのこと、学園の生徒達はセックスした
くなったら、使用申請書さえ提出すればいつでもこの部屋でまぐわっ
ていいことになっている。

「し、下準備って……？」

「それはもちろん、クリトリスのお手入れだよ」

レオンがニッコリ微笑み、私の下腹部を指した。

（来た……！）

この世界では、つるりと剥けて大きく膨らんだクリトリスこそ至高とされている。

なので貴族の子女たちはこぞつてクリの皮を剥き、あの手この手でクリトリスを肥大させ社交界デビューに備えるのだ。

レオンルートではヒロインであるレティシアがクリをズル向けにされて徹底的に責められるシーンに興奮してオナニーのオカズにさせて頂いたモノだが――

（アレを……実際に体験しちゃうんだ……）

ごくり、と思わず喉が鳴ってしまふ。

前世での私は少ないながらも男性経験はあったが、彼らとのセック

スで絶頂に達したことはなかった。

どちらかというとオナニーの方が気持ち良かったけれど、それも指で軽く弄る程度だったし。

なので、クリイキなんて未知の領域なのだ。

(クリでイクって、どんな感じなんだろう……)

思わず下腹部をじっと見つめてしまう。

期待と不安が入り交じった様子の私の肩を抱き、レオンが優しく囁いた。

「初めてだから不安だよ。大丈夫。全部僕に任せて」

レオンが私の髪を一束とり、そっと口づけた。

髪の毛に性感帯なんてないはずなのに、あまりにも彼の仕草が色っぽすぎてぞくっ♡としてしまった。

レオンが私の頬を包み、顔を近づける。

ちゅ♡と柔らかな唇が軽く触れて、指先が顔の輪郭を愛しげにたどる。

私のかたちを確かめるように、レオンの指が首筋から鎖骨、胸の膨らみを撫でて下腹部へと降りてゆく。

「……ここ、触ってもいい？」

スカートの上から股間をくつ、と軽く押されると、それだけでじわっ……♡とおまんこが熱くなるのを感じる。

黙って頷くと、レオンはスカートの下に右手を潜り込ませ、ショーツの上から探るように指をさまよわせる。

「ふふ。可愛いクリトリスを見つけたよ」

すりっ……♡

総レースのショート越しに、レオンの指先がクリトリスを軽く擦った。

たったそれだけなのに、ぶりっ♡と電流を流されたみたいに腰が甘く痺れる。

「くっ♡は……ひえ……っ♡」

（あ……っ♡レオンの指でクリっ♡触られてる♡すごいっ♡これっ、現実なんだ……っ♡）

レオンの指は欲しくしなやかで、でも有無を言わせない力強さがある。

男の人の指なんだって、今さらながらに実感する。

「どうしたの？ 足がカエルみたいに大きく開いちゃってるよ。もしかして、もっと触って欲しいのかな？」

すりっ♡すりっ♡

レオンの指腹は小刻みに淫豆を擦り続ける。

緩やかな刺激に肉芽がもどかしげに震え、自らの存在を主張するかのようにぶつくりと膨らんでゆく。

（まだ下着越しに触られてるだけなのにつ♡こんなに気持ちいいなんてえ……♡）

「クリトリスがぶつくり膨らんできたね。その調子だよ」

レオンが微笑み、クリトリスの輪郭に沿ってくると円を描く。

根元から溝をほじられ、屹立するクリトリスの形がくつきり♡とシヨーツの上から浮かび上がった。

「……っは♡だ、だめえ……♡そんなに、クリばかり弄ったらあ……♡」

「でも、クリのお手入れをするためには、まずはしっかりと勃起させないと。すぐにイケなくて辛いだろうけど、頑張って」

かりっ♡かりっ♡

レオンの指先が、半勃起状態のクリを甘く引つ搔く。

「……っ♡レ、レオン♡そ、それだめっ♡かりかりされるとお♡このままっ♡イキたくなっちゃうからあ……♡」

「ダメだよ。ちゃんと我慢して？ 社交界ではこの程度でイクなんて恥とされるって、座学で習っているでしょ？」

「そ、そうだけとお……♡」

つつい身体がくねって、熱い吐息を漏らしてしまう。

レオンの指は、クリの神経が集まった部分を的確に引つ搔いてくるので、もうじれったくてたまらない。

かりかりっ♡ぐにいゝ♡

レオンの爪が肉芽に食い込み、軽くクリを押し潰す。

ぷちっ♡と何かが弾けるような感覚と共に、じゅわあ♡とおまんこから蜜があふれ出てきた。

ぐっしより♡とクロツチ部分が濡れて股間に張りつく。

むわあ……♡とえっちな匂いが立ちこめて、頭がクラクラしてきた。

「ほら……もう少し頑張って」

レオンが私の額に唇を落とす。

ちゅ、ちゅつと頬や鼻先にくちづけ、唇に軽く吸い付く。

さつきと同じキスのはずなのに、クリを弄られながら触れられると背筋がぞくっ♡と波打ってしまう。

「ふ……うん……♡」

僅かに開いた唇の隙間から舌を差しこまれ、さつきよりも深く口づけられる。

れろおゝ♡ぬろろ♡れろおゝ♡

レオンは舌先を丸め、口蓋を舐め回しはじめた。

舌は自在に蠢き、頬の裏や舌の付け根、歯の裏側までねっとり♡と撫でてくる。

（何これっ♡口の中犯されてるみたいっ♡）

「ほら……舌、突き出して」

「ふぁ……♡こ、こう？」

「うん、そう。上手だね」

ぢゅるううう♡つとレオンが私の舌に吸い付く。

肉厚の舌が私の舌を捉え、さしずめ蛇の交尾みたいにぬっちより♡

と艶めかしく絡み合う。

普通にキスしてるだけなのにエロすぎる。実質セックスでは？

(レオン……キス上手すぎ……♡)

確かレオンってゲームでは童貞だったはずなんだけど……

とても初めてとは思えない。

この世界の男の人はみんなこうなんだろうか？

「……何を考えてるの？ 僕だけを、ちゃんと見て……」

私の思考を見透かしたかのように、レオンが低く耳元で囁く。

おしおきだと言わんばかりに強く舌を吸い上げられ、息が上手く出
来ない。

「ん……♡あ……♡ふ……♡はふう……♡」

レオンがきゆう♡と爪を立て、半勃起状態のクリトリスをかりかり

っ♡と引っ搔く。

同時に上顎の裏から喉近くまで舌先で擦られると、くすぐったいよ
うな、じれったいようなむずむずした感覚が生まれてきて。

無意識に腰がヒクついてしまう。

「気持ちいいの？ 腰、動いてるね」

「あ……ふう……♡だってっ♡口が♡おまんこみたいにつ、なっちや
つてるからあ……♡」

「ふふ、いやらしい顔をして……とっても可愛いよ」

歯を立てて顎を甘噛みされ、ひくつと喉がひきつる。

かりっ♡かりっ♡と一定の速度でゆるく肉粒を引っ搔いていた指先
の動きが、次第に強く早くなっていく。

「ひ……♡んう♡レ、レオン♡だめっ♡クリぐりぐりするのだめっ♡

「いつちやう、からあ……♡」

「まだ下着の上からしか触ってないのに、君は敏感だね。いいよ、エレガントにいつちやって」

ぐりっ♡ぐりっ♡ずりずりい♡

下着ごと膨らんだ淫芽を擦り上げ、ぷちゅつと押し潰す。

クリの先端からじいん♡と痺れるような快感がこみ上げて、ぱんぱん♡に肉粒を腫らしてゆく。

「ひう♡だめ♡ほんとに……イク♡っあ♡は♡ああああ♡♡」

私はレオンの腕にしがみつき、びくっ♡と腰を震わせた。

じんじん♡とおまんこが火照って、じゅわつと愛液が溢れてショーツのクロッチを更に濡らす。

「可愛くイケたね。まだ甘イキつてところかな？」

私の頭をよしよし♡と撫で、レオンが微笑んだ。

でも、まだ終わらない。

むしろここからが本番だ。

「さあ、準備も出来たし……クリのお手入れに移ろうか」

レオンが私の内ももをさする。

ショーツに手がかけられ、するすると脱がされた。

「ふふ、しっかり皮を被っているね。僕のために貞節を守ってくれていたと思うと嬉しいよ」

この世界では、自分でクリを剥くのははしたないとされている。

セックスパートナーとなる男性に剥いてもらってこそ一人前のレディとして認められる——らしい。

（そもそも、皮を剥くのがたしなみってのがすごい話だけど……）

むにい……♡

左手の指でクリトリスの脇を拡げられる。

「あ……♡」

「動かないで？　じっとしててね……」

右手の指がクリトリスのキワに添えられる。そのままぐつと力を込め、ゆつくりと皮を上げ始めた。

ぶりゅんっ♡

「ひゃうううう♡♡」

ぷりっぷりの陰核が皮から飛びだした瞬間、ぞわぞわつと腰の周りを甘い痺れが取り巻いた。

「ふふ、ちっちゃくて可愛いクリトリスだね。この感じだと……自分でもあまり触ったことはないのかな？」

初めて触れる外気に怯えるように縮こまる陰核を、指でつん、と突く。

「あうう♡」

軽く突かれただけなのに、仰け反ってびくびくと腰を震わせてしまった。

さつきまでショーツ越しにたつぷりと弄られていたおかげで、溜まりに溜まった性感を放出したくてカラダがウズウズしてるみたい……

♡

かりっ♡かりっ♡

今度は直接、指でクリトリスを引っつかかれる。

剥き立てホヤホヤのぷりぷり♡肉芽は、指先にぷよん♡と吸い付いて柔らかい刺激をおまんこに伝えてくる。

「んっひ♡いっ♡あっ♡はああ♡」

「ふふ、クリがもつと撫でて♡つて言ってるみたいだね。甘えん坊だな」

とん、とん、とあやすようにクリを叩かれる。

ふに♡と指腹が陰核に触れるたびに、ツン♡とくすぐったいような、むずがゆいような感覚が先っぽに溜まってゆく。

「っあ……♡ん……♡はあああ……♡」

気づけば勝手に足が開いて、腰を浮かせて自分からレオンの指にクリを押しつけていた。

だってもつと触って欲しい。

こんな刺激じゃ全然足りない。もつともつと気持ち良くなりしたい。

っう……♡

レオンの右手が、ねっとり濡れた秘裂を撫でる。

「ひゃあ……っ♡」

「おまんこ、もうびしょびしょだね。クリ弄っただけでそんなに感じちゃった？」

「う……ご、ごめんなさい……♡」

「ふふ、謝らなくていいんだよ？　むしろ嬉しいんだから」

蜜をたっぷり♡纏わせた指先が肉芽をこね回し、ぬとぬと♡とえっちなおまんこ汁をすり込む。

「さあ、さらに美しいクリにするために、しっかりと磨いてあげないとね」

レオンの手の中に、白いガーゼのようなものが浮かび上がる。

てかてかぬるぬる♡になったクリトリスにガーゼを被せ、レオンが

指で軽く擦り始めた。

「っ♡んおおおっ!?」

ガーゼの繊維が剥き出しの肉芽と擦れ、強烈な悦痺が背筋を駆け抜けた。

（っにやにこれえええ♡ガーゼで♡ゴシゴシされてるだにやの♡にやんでごんなにぎもぢいいのおお♡♡）

根元をレオンの指がガーゼ越しにつうう♡となぞり、そのまま裏筋をすりすり♡と撫でる。

レオンの指が動くと連動するようにガーゼがずりり♡と剥き身を滑り、つう♡とクリの中心から甘ったるい痺れが湧き上がる。

「よしよし、いい感じにクリがぶっくり勃起してるね。知ってた？」

クリも男のちんぽみたいに、裏筋が性感帯なんだって。ね？　どんな

感じ？」

「どんなって言われてもお……♡わかんや……いよお♡」

「もう……ダメだよ？ ちゃんと言語化しておかないと、セックス実習はどういう風に感じたかレポートを提出しないといけないんだからね？」

「分かってるけどお……♡ うあ♡クリい♡こねこねするのらめえええ♡」

にゆるう♡にち♡にち♡

愛液を潤滑油代わりにして、こすこす♡と指腹が肉芽を擦り上げる。

ガーゼ越しにぷちっ♡ぷちっ♡と張り詰めた肉芽を押し潰されると、その度にお腹の裏がきゅんきゅん♡して、腰がへこついてしまう。

「ほら……今どんな風に感じてるか、ちゃんと言葉に言い表してみて？」

「だからっ♡ぎもちい……しかっ♡わかんないしっ♡」

「それじゃレポート赤点だよ？　ちゃんとと言えるまで、イカせてあげない」

「にゃ　ああ♡レオンの意地悪♡」

（こんなのっ♡ゲームになかったっ♡クリっ♡虐められすぎ♡）

「ね？　ちゃんとクリを可愛がられてる感想を僕に教えて？」

むにいと根元から屹立した肉芽を摘まんで引っ張り上げられ、ぶるぶると左右に揺らされる。

「やめでっ♡余計何も考えられなくにやるから　ああああ♡」

もう頭がうまく働かなくて、ろくに口も回らない。

半開きになった唇からこぼれるのは、唾液ばかりだ。

「づゝえゝあ……う♡クリの真ん中がぁ……♡じんじんしてえ♡
お腹の下の方がじくじくしてえ……♡すつごく、ふわふわした感じ
っ……♡」

それでもどうにか感想をひねり出すと、レオンが満足げにうなずいた。

「うん、よく出来ました。ご褒美にもうっつとふわふわさせてあげる」

ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡ちゅっ♡♡

みっちり♡と肉芽を摘まみ、根元からクリを扱きあげる。

ぷちぷち♡♡と連続で快感の粒が弾けてはしたなく両足が、かに
股にぱか♡と開いて腰ががつくん♡がつくん♡と大きく揺れた。

「びう♡クリトリスどくどくっつて脈打ってっ♡ちんぽみたいにな

ツキバキになつてっ♡痛いくらい勃起してるっ♡射精みたいにぎもち
い……いいいい♡」

『いやいや』するように首を横に振りながら、ひたすら絶頂に向か
つて腰を振りたくり、導いてくれるレオンの指にクリをぐりぐり♡
と押しつける。

「ああ……♡とってもえっちで可愛いよ♡イって♡僕の指で思う存分
クリアクメしてっ♡」

「ゝあゝ♡ぎもぢい♡ぎもぢい♡イクう♡もおだめええ♡クリでっ
♡アクメするっ♡あっ♡あああああゝ♡」

ふぢゅっ♡

ヒクつくおまんこから蜜が吹きだし、べつとりと内腿を濡らした。

視界が真っ白に染まり、私は大きく息を吐いてレオンの膝へ倒れ込

んだ。

「はーっ♡はーっ♡はーっ♡」

身体に上手く力が入らない。ぶるぶると両足の付け根が引きつつて、小刻みにびくんびくんと震えている。

(身体、あつつい……♡)

頭のとっぺんから足のつま先まで、ぼうつと熱に浮かされたみたい
に熱くて。

おまんこはじんじんして、絶頂の余韻を味わうかのようにヒクついで蜜を滴らせる。

レオンが額にかかった髪をそつとかき上げ、口づけた。

「よく頑張ったね。素敵なクリトリスになって僕も嬉しいよ。これでいつ、社交界デビューしても恥ずかしくない」

「ふあ……♡よ、良かった……♡」

「じゃあ、次は仕上げをしないとね」

「えっ……!?!」

レオンが私に向かって手をかざし、何か呪文を唱える。

すると――

「こ……これって……!」

レオンの手の中に浮かび上がったもの。

それは、いわゆる大人のオモチャ――『吸うやつ』だったのだ！

しかも、私が気になってた香水瓶型のものだ。

（どうしてレオンが、これを……!?!）

あつけに取られて呆然と『吸うやつ』を眺めていると、レオンが私の唇に人差し指を当ててイタズラっぽく微笑んだ。

「ふふつ。僕は君のことならなんでも分かるんだよ？」

「レオンって……もしかして私の頭の中を読めたりするの……？」

「そうかもね？　これって、クリを吸引して更に細かく磨いてくれる道具らしいね。真珠のように輝く君のクリが、ますます美しくなってしまうな……♡」

レオンは『吸うやつ』に頬ずりしてうつとりと呟く。

（こ、こんなイベントあったっけ……？）

確かにゲーム本編でもレオンはクリに異様な執着を示していたけれど、さすがにオモチャは登場しなかった。

（レオンは私の記憶を読んでもつぽいし……もしかして私の仕様にシナリオが書き換えられてる……？）

そんなことあり得るのだろうか。

いや、でもそもそもゲームの世界に転生してる時点で『あり得ない』んだし。

もうなんでもありなのかも。

「さあ、早速装着してみよう」

レオンが私の足をぱかつ♡と開き、まだ絶頂の余韻さめやらぬ肉粒へ『吸うやつ』を被せる。

そしてスイツチを入れた途端――

「くっ♡　いひひひひひん♡」

うゝいひひひひひひひひひひ♡♡

モーターが唸り声をあげ、ちゅううう♡と容赦なく肉芽を吸い上げた。

「うそお　おおお♡にやにこれえええ♡やああ♡クリいい

♡吸い込まれりゅううう♡」

つぽぽぽぽぽぽ♡

レオンの指で存分に弄り倒されてばんっばんに充血したクリに密着し、吸い付いて離れるを繰り返す。

（ああああ♡振動しゅごいつ♡ズル向けクリにビンビンくりゅう♡やばい♡やばい♡やばい♡）

つぽ♡つぽ♡ちゅぽ♡ちゅぽ♡ちゅぽ♡

根元からぶるぶると揺らされ、しつこいくらいに神経が集まった部分を蹴られる。

ぐんっ！ と大きくお尻が持ち上がり、両足をばたつかせる。

「あっ♡ひいい♡ っおっ♡クリッ♡揉みくちやにしゅるのため

えええ♡」

「ふふ♡口とおまんこからダラダラヨダレたらして、かに股で腰へこつかせて……君ってほんとにクリを虐められるのが大好きなんだね」

♡

すりっ♡すりっ♡とレオンの指が制服のブラウス越しに乳首を擦る。ただでさえクリイキしまくって敏感になってるのに、乳首まで弄られたらたまったものではない。

「乳首もクリもビンビンに勃たせて……♡それでこそ一人前のレディだよ♡これからじっくり育てて、どこに出しても恥ずかしくないデカクリにしてあげるからね♡」

♡

「もぉ やめでっ♡ イっでるっ♡ずっと イっでるがらあああ

ゆっさ♡ゆっさ♡

しこしこ♡

レオンが『吸うやつ』を小刻みに揺らし、まるでオナホでちんぽを扱くように上下ににゅぽにゅぽ♡と抜き差しする。

「フフ、おまんこもうびつしよびしよ♡でお漏らししたみたいになってるよ？ ホントに君はクリコキが大好きなんだね♡ちんぽみたいにいっぱいシコシコしてあげる♡」

「うゝにゃあゝああああ♡ちんぽじゃにゃいい♡やめでつ♡もおやめでつ♡クリがバカになっちゃうう♡」

「はあ……♡バカになるくらい感じてくれるなんて嬉しいな♡ほらっ♡乳首もシコシコしてあげるよ♡乳首とクリ、ちんぽみたいにおつきくしようね♡」

レオンの指がぬるおろとおまんこの割れ目をなぞり、ブラウスにペ

つとり♡と蜜をなすりつける。

透けたブラウスの下から桜色の乳首がうつすら♡浮かび上がって、ぷつぷつと布地を盛り上げる。

「すつごくえっちだよ♡可愛い♡乳首とクリチンポシコシコされて、エレガントにアクメしようね……♡」

ぬっち♡ぬっち♡ぬっち♡ぬっち♡

乳首を弄る指先と『吸うやつ』のピストンが連動して、私をあつという間に絶頂へ押し上げていく。

もう頭が真っ白で何も考えられない。

イキたくてイキたくてたまらなくて。

ただただ、高みを目指して腰をめちやくちやに振りたくる。

「ほらほら、もう少しだよ、頑張って♡」

レオンが『吸うやつ』をちゅこちゅこちゅこつ♡と激しく揺する。
じん♡じん♡とお腹の奥が切なく疼いて、熱い塊が一気にせり上が
ってきた。

脳を灼くような強烈な快感が全身に迸り――

ぐんっ、とお尻が大きく持ち上がり、きゅう♡♡♡とお尻の穴とお
まんこが同時に締まる。

「やだやだやだやだああああ♡もお無理いいいい♡いぐっ♡いぐっ
♡クリちんぽで♡いぐうううう♡」

頭の中がピンク色に染め上げられる。

ぷしっ♡と股間から蜜がしぶき、シーツに染みを作った。

ちゅぽん♡

「ひああああ……っ♡」

勢い良く『吸うやつ』をクリから引き抜かれ、最後にもうひとイキしてしまった。

「は……っ♡はぁ……♡はぁ……♡♡」

びくびく♡とがに股のまま両ももの付け根を引きつらせてはあはあと荒い息を吐く。

心地良い倦怠感に身を任せ、くったりと身体を折りたたんでレオンの腕の中へ倒れ込んだ。

丸まり小刻みに震える私の背中を、レオンが労るようによしよし♡と撫でてくれた。

「とつても素敵だったよ……♡君がここまでクリイキの才能があったなんて、嬉しい誤算だな」

「はへ……ふぁ……あ……♡♡」

「クリもつやつや輝いて、とってもふくふくして……芸術品のように美しいよ。額装して部屋に飾っておきたいくらいだ」

レオンがうつとりした顔で、一回り大きく膨らんだクリを優しく撫でた。

「ふぁ……♡」

（レオンに、褒められちゃった……♡嬉しい……♡）
推しが私を甘やかしてくれる。

こんな世界線があったなんて。

（ああ……生きてて良かった……）

「この調子なら、初実習までに更にクリに磨きがかけられそうだね。
もうひと頑張り、してみようか」

「え……っ!？」

「クリは大きければ大きいほど、社交界での価値があがるって座学で習ったでしょ？ 僕の妻にふさわしい、立派なデカクリに育てないとね♡」

レオンが『吸うやつ』をかざし、目を細めて妖艶に微笑む。

「ちよつと待って……っ……♡ ああああああ♡♡♡」

——それから、実習が始まるまでのおよそ一ヶ月。

私はひたすらレオンにクリをいじり回され、デカクリ育成に励んだのだった。